

誰も教えてくれなかった 乳腺エコー

何森亜由美(著)

国立病院機構東名古屋病院乳腺科・名古屋医療センター放射線科

遠藤登喜子

乳房の超音波解剖を超音波特性と組織解剖の対比で解明した書

乳腺超音波検査は近年、マンモグラフィ検診の普及により発見される異常の精密検査の必要性から、また、マンモグラフィ検診の精度補完のための手法として注目すべき変化を示してきた。しかし、本書にも書かれているが、超音波検査では視触診で検出された所見の裏付け検査法として、病変のみが検討されることがほとんどであった。それは、超音波検査が断層像として得られる画像情報であり、3次元的情報を記録・提供しがたい検査法であったことにもよっている。

近年、腫瘤像を形成しない病変—非腫瘍性病変の診断の重要性が認識されることにより、正常乳腺から非腫瘍性病変を検出すること、病変と正常乳腺の鑑別など、正常乳腺像を意識することの重要性が脚光を浴びるようになってきた。従来も、正常乳腺の超音波画像を前に、“いったいこの画像は何を見ているのだろうか”とつぶやくことはあったが、超音波画像が組織の何を反映しているか、明快なコンセンサスは得られないままであった。そして、超音波の屈折・反射・散乱(後方散乱)による画像特性と組織を対応させたとき、われわれの目は乳腺上皮のみならず、間質にも拡大された。組織学的構造という大きな枠組みの中、細胞と間質、両者の密度と配置が超音波画像を成り立たせている。これに気が付いたとき、超音波による乳房構造の解像は「目からうろこ」であった。

本書は、まさにこうした「誰も教えてくれなかった」乳房の超音波解剖を超音波特性と組織解剖を綿密に対比することにより解明し、単純明快に示したものである。それは、日々の疑問に対し

真摯に向き合ってきた著者の成果であり、それを支えた研究協力者との共同作業が生んだ宝といえよう。本書は、個々の病理病態に関する知識の集成ではなく、実践における今後の発展をさせる方法論の提案として重みがあると思われる。

著者が言いたいことは、“乳腺の超音波診断は乳腺の正常構造を把握することから始まり、正常構造からの逸脱が良性・悪性病変を示すものである”ということに集約されている。正常構造を把握するための、超音波検査の実践法—「プロープ走査」は超音波検査を実施するものには基本であり、「画質の設定」は何を見るために何が必要か、を提案するものである。そして、正常乳腺組織、腺葉構造と分布、脂肪化による変化を端的に表現し、“さあ、これだけ理解できたら乳腺の超音波検査をしてごらん下さい”と後押ししてくれる。迷ったらもう一度読み返してその意味するところを読み解く。そうした中から、著者の貴重な経験と洞察が伝わってくるであろう。本書の記述は簡潔であるが、深い。“実践から学ぶとき、私たちに無駄な検査は1例もありません”というメッセージや、“超音波検査を行ううえで、押さえるべきことは、1)等エコー構造を迫えるようになること 2)立体的腺葉構造読影法 2×3のポイント の2点”に集約された著者の乳房超音波検査者へのメッセージは心から共鳴するところである。

乳房超音波検査に長年従事してこられた方には乳房超音波の原点に立ち返るために、これから始められる方には超音波検査マスターの基本として本書を一読されることをお勧めしたい。

●B5/頁168/2014年

定価: 本体5,500円+税 [ISBN978-4-260-01938-5]

医学書院 刊